

## ドロップオフとドロップオフⅡ訓練

日本ライトハウス  
芝田裕一

### 1. ドロップオフ訓練とその問題点

歩行訓練の課題の一つにドロップオフ訓練がある。この訓練は、訓練生を自動車に乗せ、訓練に使用した既知の地域のどこか一地点（訓練生にはわからない）に降ろし、つまり、作為的に道に迷った状態にして、前もって定めた目的地を、原則的には援助依頼なしで発見させるというものである。文字通り苛酷で、そして比較的非現実的な訓練である。

このドロップオフ訓練の目的には次の3つが考えられる。

- ①迷った状態で冷静に判断をし、今まで獲得した各技術と歩行方法を安全かつ能率的に行なえるかの評価を行なう。
- ②さまざまな手がかりを必要最大限活用して定位させ、コースを選定させる。
- ③独力での歩行に対する自信を養なう。

目的からみると、このドロップオフは非常に訓練効果の大きい訓練でなければならないはずであるが、実施にあたって考慮しなければならない点がある。それは、不安やある種の恐怖といった精神的負荷を必要以上に訓練生に与えてしまうことである。これは、指導員が訓練開始に際して行なう教示に配慮を加えることによってある程度、軽減することは可能である。しかし、訓練の性質、また、カリキュラム上の訓練のおかれた位置から、どうしても訓練の総復習、見極め、その地域（単元）の最終評価、テストといった印象を少なからず訓練生に与えてしまうことは否定できない。もちろん、これは訓練生の性格に大きく左右されるため、指導員が想像する程、プレッシャーを感じないケースもあるが、逆に、想像以上の場合も存在する。

一般的に、晴眼者に比して視覚障害者の歩行時の緊張度は高いものであり、歩行指導員はその事実を把握した上で、無用の精神的負荷は与えないように—しかし、歩行という事態の性質上、ある程度の緊張感が必要であるが—指導しなければならないが、そういう点からみても、このドロップオフ訓練そのものが訓練生に与える必要以上の精神的負荷は除去しなければならない。

このドロップオフ訓練は、アメリカの歩行訓練の体系に組み込まれているものであり、歩行訓練が我国に導入された時、共に持ち込まれた訓練方法である。しかし、各種の条件、特に環境条件が根本的に異なる我国で、すべてのアメリカの歩行訓練方法が有効であるとは限らない。事実、現在の我国の訓練方法はかなりアメリカのそれとは異なったものになっている。その大きな条件の一つである地理的環境は、我国では視覚障害者にとって必ずしも問題のないものとは言えない。歩車道の区別のない道路が主要歩行路であること、看板・駐停車の車・放置自転車等の障害物が多いこと、工場・工事等の騒音が多いこと、など、むしろかなり環境条件はわるいと言うべきである。それに対してアメリカの環境は歩車道の区別が、境界線的、距離的にも明確にされており、ほとんど障害物がないような、我国からすれば、比較にならない程の良さである。つまりアメリカでは、前述の歩行の際の緊張度ははるかに低い状況なのである。この状況でのドロップオフ訓練では、ここで問題にしている精神的負荷は、それほど訓練生に与えられるとは考えられない。

結論的に言えば、アメリカであれば、ドロップオフ訓練はそれなりの意味をもつが、我国では非常に難易度の高い、無用のプレッシャーを訓練生にかけるものであるだけに、比較的効果の低い訓練にならざるをえない。この精神的負荷は物理的な尺度で表わされにくいものであるため、指導員は安易にドロップオフ訓練を行なってしまい、かえって訓練生の自信を喪失させる結果となることが多い。また、迷った状態で援助依頼ができないという現実性に乏しい、訓練的な訓練という面ももっている。このため、この訓練はあえて必要性がなければ必ずしも実施しなければならないことはない。また、訓練プログラムの一つとしてどうしてもドロップオフ訓練を実施する必要性が生じた場合は、前述のプレッシャーを除去するよう配慮しなければならない。そこで、ドロップオフ訓練の目的が一部変更されるがその無用の精神的負荷をある程度除去し、より実生活に即した新しいタイプのドロップオフ訓練を次に述べる。ドロップオフには変わりがないので、これをドロップオフⅡ訓練と名づける。

## 2. ドロップオフⅡ訓練の内容

ドロップオフⅡ訓練は、訓練生を自動車に乗せ、既知の地域内のあらかじめ限定した範囲内の一地点に、訓練生にはその場所をわからないようにして降ろすところまでは従来のドロップオフ訓練と同様であるが、その後、コースだけを口頭で訓練生に教示するというものである。ただし、この「コースの教示」は非常にシンプルなものであり、援助依頼によって一般の通行人から得られるコースについての情報という程度のものでなければならない。ファミリーセッション的な詳細なコース説明では、ドロップオフ訓練の目的から大きく逸脱してしまうからである。すなわち、「ここからまっすぐ行って2本目を右へ行き、1本目を左へ曲ったら左側にあります。」というような内容である。これにより、訓練目的の②の一部が除かれてしまうが、ドロップオフによる精神的負荷はある程度軽減され、一般の通行人から得られる最低限の情報を得るといった現実的なものとなる。

このドロップオフⅡ訓練のポイントは、この「コースの教示」であるが、前述以上の詳細なものは不要である。道路は、歩車道の区別のあるものもないものも同様に扱われ、1本、2本というような形で教示されなければならない。また、交差点についても、その大きさ、信号の有無等、特徴はすべて無視されなければならない。方向については、当然ながら左右を使用し、方角は使用してはならない。目的地は、既知地域であっても、その訓練生にとって未知の所が最適である。そして、ランドマーク、距離については目的地発見のためだけに使用されなければならない。たとえば、「～〇本目を右へ曲って、約20mの左側で入口に向かって右に植木がある。」などである。もし、訓練生にとって適当な未知の目的地がその地域内に存在しないような場合は、既知の所を選び、名前は伏せてランドマークや角からの距離だけで教示を行えばよい。

ただ、重要なことは、目的地、ドロップオフの位置、教示内容の程度（特に、目的地発見のためのランドマーク、距離等の情報量）を選定することであり、これらは難易度別の多くの段階が考えられるため、その訓練生の能力に応じ、その訓練生の訓練カリキュラムに即したものが選定されなければならない。また、ドロップオフⅡ訓練では、目的地を発見した後に、出発地点、つまりドロップオフ地点はどこであったかを訓練生に回答させ、また、実際に逆のコース

を用いて出発地点へ戻らせるということも手続の一つとして実施する。

### 3. ドロップオフⅡ訓練の効果

ドロップオフⅡ訓練の性質上、冒頭に挙げたドロップオフ訓練の目的のうち、②「ランドマーク、クルーを必要最大限活用して定位し、コースを選定させる。」の一部が除去されてしまう結果となる。しかし、定位やコース選定については、それまでの訓練で十分行なわれているはずであるし、また、コース選定はSD訓練の主目的の一つであるため、あえてドロップオフ訓練で行なわなければならないものではない。それよりも、ドロップオフ訓練にはなかった、「援助依頼のための準備訓練」という新たな目的が加えられることになり、また、問題であった不要の精神的負荷もある程度軽度され、訓練効果はかなり増大する。

この「援助依頼のための準備訓練」という目的については、特に、先天的視覚障害者にとっては必要なものである。つまり、ある訓練生にとっては「ここから2本目を左へ」という教示の意味が明確に理解できず、2本目は今、立っている道路を入れるのか入れないのかで迷うことになるのである(図1)。このような教示のされ方、しかし、一般社会では常識的な教示のされ方を受けた経験のない訓練生にとっては、このドロップオフⅡ訓練は、援助依頼のための非常に有効な準備訓練となる。このような訓練はもちろんSD訓練の中にも組み入れが可能である。

また、歩行訓練の重要な目的かつ課題である交差点発見・横断・曲り方の総復習となる。つまり、訓練生にとっては、交差点定位の失敗は許されないからである。そういう意味では、ドロップオフⅡ訓練はドロップオフ訓練よりも難易度が

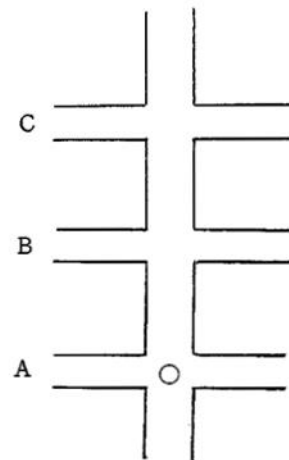


図1 訓練生の立っている道路Aを入れれば、2本目はBになるが実際の2本目はCである。

高いとすることができる。

以上述べてきたように、アメリカとは条件的に異なっている我国では、ドロップオフよりもドロップオフⅡ訓練の方が適していると言うべきであろう。しかし、重要なことは、指導員がより多くの種類の訓練方法を知り、そして、その訓練をその訓練生に適した内容にモディファイすることであり、このドロップオフについても、従来のドロップオフ訓練を行なうかドロップオフⅡ訓練を行なうかあるいは全く訓練しないかは、指導員の好みではなく、訓練生にとってどれが効果的かで判断される、つまり depending on the student であるべきである。また、内容についても、やはり、訓練生に応じて、援助依頼を可能にするなどの修正が必要である。しかし、いずれにしても従来のドロップオフ訓練は前述のリスクが大きいため、我国では軽々しく実施されるべきものではなく、指導員には一考が必要であろう。